

地域の会 平成24年度新潟県原子力防災訓練 視察感想

日 時	平成25年3月23日(土)9時00分～13時
視察先	<ul style="list-style-type: none">・ オフサイトセンター・ 柏崎市役所4階防災対策本部・ 松波コミュニティセンター
視察参加者	<p>【委員】 浅賀、新野、川口、佐藤（幸）、高桑、高橋（優）、中沢、前田 ・・・8名</p> <p>【地域で訓練に参加】 池田、桑原、佐藤（正）、三宮、武本（和）・・・5名</p>

【概要】 上記施設での自治体、住民各々の対応状況について視察を行った。
委員の意見、感想を以下にまとめた。

【委員感想・意見】

視察先：オフサイトセンター

《委員》

オフサイトセンターでは、避難全体の運びを視ることができました。

テレビ会議、記者会見などを通して、避難する立場として思ったこと、感じたことは、

・原発内の事故の経過や様子は、東電からの報告によっていたが、事故時には、的確・迅速な対応ができるためにも、規制庁の専門家が現場に入り、国が直接事故の様子を伝える体制が必要ではないか。

・ヨウソ剤服用の手段と指示が、福島事故後 2 年経ってもはっきりしていないことは問題、住民の被ばくに係ることなので、早急に明確にして欲しい。

・今回の訓練は、PAZ 圏、あらかじめ事故が分かっている少人数の避難であったが、ようやく避難ができたという印象だった。

実際、複合災害で突然避難することになった場合、オフサイトセンターはすばやく機能できるのだろうか、柏崎刈羽全住民の避難は可能なのだろうか、などです。

視察出来たことで、防災について具体的なイメージをもって考えていけるように思います。

この機会を与えていただきありがとうございました。

《委員》

・大規模地震で直流電源系統喪失で 10 条通報事象発生という設定で訓練。

・9:30 総括班から 10 条事象発生の庁内放送。

・9:35 現地災害対策本部立ち上げ。各班が対策を発表。柏崎市、刈羽村は原子力災害対策本部設置。消防本部班では広域消防必要と県に要望。県班も情報収集、モニタリング異常無し確認。模擬記者会見で県の住民安全班の 5Km 圏内から段階的な避難誘導で要支援者の避難は各地域に委ねるお答え。地域は要支援個人を把握しているのだろうか？

・10:35 エリアメールで ” 訓練 避難指示 ” 「訓練 柏崎刈羽原子力発電所で事故が発生しました。・・・」一斉に届きました。(携帯メニューキー非対応で消去出来ない)

・テレビ合同対策会議では知事に総理から 15 条事象発生で 7h 後炉心溶融。

ヨウ素剤は薬事法で副作用もあり効果が分からない。誰が飲む指示？

・松浜コミセンの防災無線が放送されなかった。海岸通り車渋滞等々問題点多々。今後に生かしてほしい。

《委員》

・先ず、以前より会場がボリュームアップしておりほどよい緊張感が伝わった。

・県の対応が前向きに感じられた。

・今回は初動の情報伝達の確認が主であったが、今後は、あらゆる機会を捉え、住民や県民への事前に持つべき情報提供とその理解に平時に取り組み、防災訓練において、その評価を積み重ねていくよう期待する。

・国は、立地現場の声に対し、できること、できない理由などを伝え合い

ながら継続して防災協議の場を設け、オープンな情報をその都度国民に提供してほしい。

- ・防災無線などを通じ、防災訓練を全住民がリアルタイムで感じ、自分のこととして捉えられる機会にもしてほしい。
- ・次には、広域の住民との連携も必要であり、それぞれの位置の住民が他の地域の課題も共有することが重要となると思う。
- ・災害時、住民が互いに知りたい情報を語り合う必要があると感じた。

《委員》

オフサイトセンターに到着間もなく、友人からメールで「防災訓練に参加しているが、8時の防災無線が入らず、気がぬけちゃった」とありました。こんな時の市の広報担当は、訓練だからと次の策を考えなかったのでしょうか（広報車など）

模擬記者会見もシナリオ通りの記者でなく、新潟日報、柏崎日報などの方が参加できたら、もっと訓練になると思います。（広報がより住民に近づく気がしました）

（オフサイトセンターにて）

15条事象発令後の合同会議で、テレビ電話で県知事の質問に、いくつか「検討します」という返答がありました。事態を把握できていないのではないのでしょうか。緊急事態なのに、状況判断不足を、国の指示待ちが多く感じられました。県主催とはいえ、2年前の福島原発災害を考えると、「避難」ひとつとっても住民の不安を最小限に出来る策を考えていただきたい。

「防災訓練」はとても大切であるが、いつもシナリオ通りだと、災害が実際となった時には、パニックとなるのは、行政ではないのでは・・・と考えてしまった。

住民は、情報を正しく理解し、素早い行動が大切とも実感した。自分で避難出来る判断力と行動力を身につける事も大切とも考えさせられた。

そのためには、普段から、事業所、行政共に正しい情報をリアルタイムに提供してほしい。

視察先：柏崎市役所 4階防災対策本部

《委員》

- ・防災対策会議を開いて種々伝達事項などを話しをしているが、マイクを使わないので話しの内容が周辺の参加者に聞き取りにくい。
- ・情報の伝達方法、指示、命令など誰がどのようにするのかははっきりしなく曖昧さが目立った。緊急を要するものなので、事前に役割分担をきちんと決めておき、一刻でも早い情報伝達、指示ができるようにすべきだ。
- ・被ばくを防ぐためのヨウ素剤の服用について、具体的な方法が訓練の中に盛り込まれていないのは残念である。早急に服用方法についての指示を

出す必要がある。

・今回の訓練のポイントの中にある「自家用車なども含めた個別の避難対応」とあるが、訓練の中に盛り込まれていないようだったがどうしたのか。現実的なことを考えると自家用車での避難が大変多くなり、道路の渋滞などで避難が困難になることが福島などで実証されている。是非訓練を実施してほしい。

・住民の避難場所については、一カ所に限定するのは危険である。風向きによって臨機応変に場所が変更できるよう予めの準備が必要と思う。

・地震により道路が損傷して通行止めになる可能性も十分考えられることなので、避難対策について考慮する必要がある。訓練の中に盛り込んでほしい。

視察先：松波コミュニティセンター

《委員》

・防災無線が地域別のときに放送が流れなかった。防災無線が流れない時の対応も必要である。（普段の訓練でも使用して、作動の確認は必要である）

・せっかく訓練に集まった人に、口頭で言うだけでなく言った事をあとからでもいいので配布してもいいのでは。これからの意識のために。（前回のはつめこみすぎ）

地域の訓練に参加して

《委員》

3月23日、新潟県が実施した原子力防災訓練に地元椎谷町内会の訓練に参加したので、その感想を述べる。私の住む椎谷は、原発から5キロ圏内に位置し、今回は避難対象区域として防災訓練に参加した。

1、地震発生は午前4時、中越沖地震と同規模の地震発生。午前8時からの訓練開始は何となく違和感。高浜地区は地震の影響で三町内の出入口の道路が崩れて孤立状態というのが想定。地区コミセンが情報の集約拠点になることになっていたが余り参考となる情報は無かった。

2、原子力防災指針は、福島事故の総括の上に立って出されたものとはいえないもの。従って万が一にも事故が発生した場合は福島の二の舞になりかねない。今回の訓練は、事前に作成されたマニュアルに基づいて実施されたもので、突然発生する事故ではまったく機能しないと思われる。

福島では今だ15万人の人たちが避難民として故郷を追われている現実を直視し、柏崎で事故が起きた場合でもこうした事態を繰り返さないための防災計画を策定しなければならない。

5キロ圏内に限定して捉えてみると、柏崎市からの情報連絡が7か所のコ

ミセンまで届くだけでは不十分であり、各町内単位まで直接情報が上がるようなシステムの構築が必要である。

また、交通対策も不十分で自家用車で避難する場合は、いち早く交通止めの対応を取るべきである。(例・352号線とその周辺は鯨波方面から出雲崎まで) また、今回の事故想定では15条通報に続き、7時間後に炉心溶融という事態になるという想定は地域末端には伝わらなかつた。事故の進展状況を知ることは、原子力防災にとってはどれほど重大であるかは議論の余地は無い。

3、今回の訓練は、5キロ圏の対象者はおまけで他地域の受け入れ側の訓練に主眼が置かれたのではないかと思いたくなるもの。5キロ圏内の人口が二万一千人といわれているのに訓練参加者は400人というのは何とも形だけ。実際の事故にどんな役に立つのだろうか疑問を感じざるを得ない。

福島事故以前に存在した防災計画に基づく訓練からまったく脱皮していないのではないかと強く感じた。

《委員》

我が家は原発敷地から1.5km、5号機炉心から2.5kmの地点である。

2013.03.23の防災訓練には、地域の一員として、湯沢までのバス避難訓練に参加した。

訓練参加で、万一の際には、地域全体の住民が、フクシマ周辺住民と同じように、長期間帰還困難者になってしまうことを実感することができた。

その感想を以下に記す。

1. フクシマ事故の現実を無視した防災計画・防災訓練

フクシマでは20km圏と北東50kmまでが避難対象地域で、2年経過の現在も帰還の見込みが立っていない。今回の避難訓練対象は5km圏内でしかなく不十分だ。少なくとも20km圏を対象とした全員避難訓練(それがもたらす交通渋滞等)を検証確認する必要があると考えた。早急にフクシマ事故同様の範囲の訓練が必要である。

2. 住民全体への訓練衆知が不十分

刈羽村では20集落(なぜか1集落は不参加)に対して1集落6人(要介護者2人・支援者4人)の参加を要請していたが、対象者以外への説明はほとんどなく、全く不十分であった。事前の訓練告知はチラシのみ、当日の防災無線・消防団広報のみで、詳細はほとんど知らされていない。

フクシマ事故を踏まえ、行政として原子力発電と原子力防災計画、原子力防災訓練のことを住民全部に衆知する必要があると考える。今回の訓練を、その機会として活用できなかったことが残念だ。以前は、原発推進であった国も県も市町村も、「事故は起こらない。防災訓練は寝た子を起こしかねない」との立場から、アリバイ的訓練を行ない、自己満足していたと考える。その結果がフクシマ事故。

フクシマ事故を踏まえれば、行政には、過去の対応への反省と謝罪、自己批判が必要だと考えた。

行政は、住民を被曝させない万全の防災計画を作成し、防災訓練を繰返

し実施しなければならない。

3. 行政担当者の真剣さは十分だろうか。周辺地域への申し訳なさを感じた。

石打 PA でのスクリーニング対象者は我がバス 6 集落 36 人と役場担当 2 人中、6 人のみであった。

時間の制約等は判るが、訓練計画策定者はフクシマの教訓をどのように考えているのだろうか。

避難先は新幹線湯沢駅近くの湯沢町公民館、湯沢町の若い職員が親切に誘導してくれた。3.11 以降に湯沢町議会は柏崎刈羽原発の運転再開反対決議をしたことを思い出す。訓練とは言え、過去に原発と共存を選んだ地域からの避難者に、親切に対応してくれた湯沢町職員（住民）に申し訳ない感情が一杯になった。

4. 原子力文化振興財団 いま知りたい からだと放射線 の配布

避難先の湯沢町公民館で原子力文化振興財団がフクシマ事故後の 2012.4 に作成した全 19 頁の「いま知りたい からだと放射線」がの配布された。その中には「100 ミリシーベルト以下の被ばくでは胎児にも影響確認は出来ない」旨の記述や「フクシマの被ばくりスクは小さい」等の記述がある。

フクシマ後でも、放射線・放射能は無害と宣伝するパンフが、避難訓練をした者に配布されたことに対して違和感を覚えた。こうした一方的宣伝パンフを訓練主催者が配布させたのなら問題である。

5. 原子力発電所・東京電力に対して

広範囲の住民（その多くは原発計画以前から長年居住してきた者、後に侵略してきた東京電力に対して優先権を持つと考える）を一方的に排除する原子力施設の存在は、絶対に認めることができない。

フクシマでは 16 万人が避難生活を余儀なくされている。その一方で東京電力関係者は、従前通りの恵まれた生活を続けている。加害者は東京電力（とその関係者）で、被害者は避難している福島の人たちである関係は、誰も否定できない。東京電力（とその関係者）に加害者としての自覚があるのか。

最近になって 1 号機 4 階の「真っ暗闇の写真やビデオ」が注目され、問題になっている。東電により 2011 秋写真撮影がなされ、2012.3 の国会事故調が調査申入れに対して担当幹部が「真っ暗闇で危険」と「思い込み」で説明して調査妨害した。そして 2013.2 に国会論議になりながら、3 月の東電の第三者検証は東電主張を追認し、民主党調査に「真っ暗闇ビデオ」を公開した問題である。撮影に失敗したのなら、再撮影して公開すれば済む問題を、なぜくどくどの責任逃れの弁明を繰り返すのか。

補償の遅延等、東京電力の独善的体質は何も変わっていない。ますますひどくなっている。

温排水の海水温改ざん事件の際（中越沖地震前 2006 年末～2007 春発覚）で頑なに補正と主張する東電担当に対し、社会常識から「補正ではない、改ざんだ」とした東電社員はもういないのだろうか。改ざんだと認めた社

員のように、地域に、東電担当者一人ひとりが、本音で向き合わない限り、東電への不信は解消できないと考える。

《委員》

私は町内防災役員として今回の訓練に参加しました。

訓練内容は町内会で独自の方法で実施しましたが年度末の実施であり事前の打合せは柏崎市とも数回いたしました。町内会役員で考えていた内容とずれがいくつが生じました。

- ・市役所職員のコミセンへの人的対応の時間的ずれ
- ・無線による住民への広報の不備（予定の時間に放送がなかった）
- ・バスでの移動による、受入れ先の訓練はどのような訓練を目的としたのかわからない。
- ・一番感じたことは避難道路の渋滞です。避難は原子力災害だけでなく他の災害でも予想されます。付替え道路等の整備の必要性を強く感じます。

視察先：柏崎刈羽原子力発電所内

- 1 緊急時対策本部免震重要棟内訓練状況
- 2 防潮堤工事現場
- 3 消防車による3号機への海水注入訓練
- 4 けが人搬送訓練

感想

先ず対策本部の状況だが大スクリーンが設置され、前に所長はじめ責任者が位置し両サイド12のテーブル別で情報・医療など各担当機能に7~8人編成の班に分かれ訓練活動を行っていた。見た目には以前の訓練と大きく違わないが、比較的静かな中で誰一人大きな声を出す者がいない、淡々と訓練が進んでいた。この理由を尋ねた。大声を出さずに状況把握や情報共有を確実にする為に、各班に情報端末の画面を装備して確実に活動出来るように喧騒を無くす改善をしているそうだ。

次に海岸側に移動し防潮堤の工事を見学したが土曜日にもかかわらず作業は継続中でかなり早い進捗状況が見て取れた。

3号機の海水注入訓練は実際に消防車二台が出動して給水ホースを設置しポンプを介して約150m先の3号機給水口までホースを繋ぐ訓練をした所要時間は約30分ぐらいだった。最悪の事態を想定して全号機同時対応も日頃から訓練をしているそうだ。

最後にけが人搬送訓練だ、車両人員とも完全装備の柏崎消防救急車が到着して運び出し終了しました。

今回は震災以降の初めての防災訓練で、過酷事故防止に向けた様々な取り組みを見学しましたが、今後も具体的な項目に絞り込み段階に応じた的確な対応での訓練など実績を積み重ね防災技術と機材の改良を図り安全に結び付けようとする姿勢を継続してほしいと思いました。実際の活動はこれからで今後の成果に期待をしています。